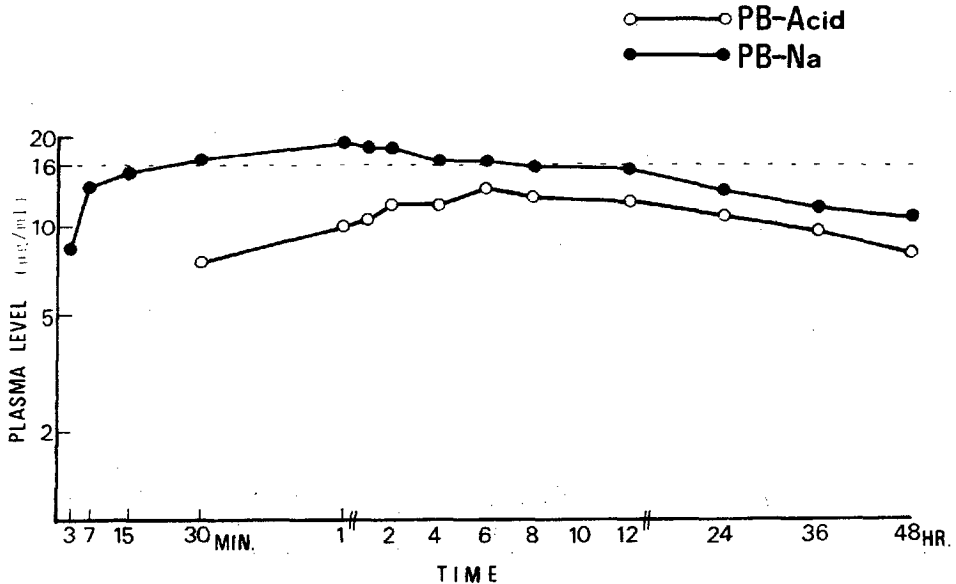


図 2

MEAN PLASMA PB LEVELS DURING THE FIRST 48 HOURS
AFTER SINGLE INTRAMUSCULAR ADMINISTRATION



13. 定型欠神発作の予後—とくに脳波の経時的変容を中心にして—

研究協力者 関 享 (慶応大学小児科)

協同研究者 川原 友二

山脇 英範

研究目的：定型欠神発作の予後の報告は少なくないが、本発作型の脳波の経時的変容についての詳細な報告は少ない。そこで本問題の一端を解明する目的で、3年～15年にわたり経過観察しれた臨床・脳波上より厳格に規定した定型欠神発作30例につき脳波所見(間歇期全般性発作性異常波)の変容を中心に予後を検討した成績を述べ、間歇期全般性発作性異常波の変容に影響をおよぼす因子につき考察を加えた。

研究対象・方法：対象は、3年～15年にわたり慶大小児科において経過観察しえた定型欠神発作30例(男子12例, 女子18例)である。本症の診断規準は次の如くである。(1)前兆なく、突然5～20秒間の意識消失をきたし、この際小運動要素、自動症、自律神経系の要素を伴うこともある。発作は頻発する。(2)臨床発作時脳波上3 c/sec 棘徐波複合の出現を認める。この(1), (2)の両者を満


足する症例を定型欠神発作とした。調査期間中(1963年1月~1975年12月)における本症の総受診数は45例、脱落例は15例(33%)であり、総受診数の67%が3年以上追跡可能であった。本症の発症年齢は2歳~16歳にわたっているが、4歳~9歳が26例(87%)と大多数を占めた。初診時までの本症の経過をみると、本発作型のみ20例(67%)、本発作出現後大発作の合併1例(3%)、熱性けいれんあるいは大発作の既往があり、その後定型欠神発作が発症したもの9例(30%)である。脳波記録は経過観察中各症例につき6~16回にわたり施行し、間歇期発作性異常波につき比較検討した。知能検査は田中・ビネー式知能検査、WISC知能診断検査などを施行した。各症例につき臨床発作、脳波所見(間歇期全般性発作性異常波)の変容、知能障害の有無につき検討した。

研究成績

1) 臨床発作の転帰(表1)

調査時全例臨床発作は消失していた。これを発作消失期間別にみると、3年以上22例(73%)、2年11ヵ月~2年5例(17%)、1年11ヵ月~1年2例(7%)、1年以内1例(3%)であった。なお、経過観察中他の発作型の出現を全例に認めなかった。

2) 脳波所見の変容(表2)

経過観察中発作間期脳波所見は種々の変容を示した。間歇期全般性発作性異常波の変容はきわめて複雑であるが、これを類型別に整理すると、全般性3c/sec棘徐波複合→消失12例(40%)、全般性3c/sec徐波複合→全般性速棘徐波あるいは不規則棘徐波複合→持続または消失14例(47%)、全般性3c/sec棘徐波複合持続2例(6.6%)、全般性速徐波あるいは不規則棘徐波複合→持続または消失2例(6.6%)の成績であった。全般性発作性異常波の変容類型と性別、熱性けいれんあるいは大発作の既往の有無、定型欠神発作の発症年齢、発作持続期間、発作消失期間、treatment lagなどとの間には一定の間連は認められなかった。なお、3例に局在性波を認めたが、いずれも経過観察中一過性に出現したのみであった。

3) 知能障害

軽度遅滞を1例(3%)に認めたのみで他の29例(97%)は正常であった。

結語: 3年~15年にわたり経過観察しえた定型欠神発作30例につき、脳波所見(間歇期全般性発作性異常波)の変容を中心に、臨床発作の転帰、知能障害の有無につき検討した成績を述べ、間歇期全般性発作性異常波の変容につき若干の考察をおこなった。

文献

- 1) 関 享他: 純粋小発作(Absence)の臨床的、脳波学的研究、脳と発達、4: 282~293 1972,
- 2) 関 享他: 小発作アブサンスー脳波面から一、臨床精神医学、5: 863~876, 1976,
- 3) 関 享他: 小発作アブサンスの予後一3年以上経過観察例について一、脳と発達、10: 161~168, 1978,

表I 臨床発作の転帰

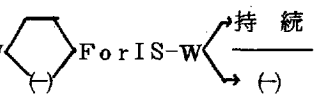
臨床 病型	例数	発作消失 (年:月)				2年以上発 作消失例(%)	G.M.の 合併	他の発作型 への変容
		≥3:0	2:11~2:0	1:11~1:0	<1:0			
I A型	20	17	2	1	0	19(95%)	0	0
I B型	1	0	1	0	0	1	0	0
II 型	9	5	2	1	1	7(78%)	0	0
計	30 (100%)	22 (73%)	5 (17%)	2 (7%)	1 (3%)	27(90%)	0	0

注：I A型 定型欠神発作で発症し、後に他の臨床発作型の合併を認めない症例

I B型 定型欠神発作で発症し、後に大発作の合併を認める症例

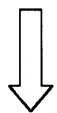
II 型 熱性けいれんあるいは大発作の既往があり、その後定型欠神発作が発症した症例で、その後定型欠神発作のみの症例と、定型欠神発作に大発作が併存している症例とがある。

表2 全般性発作性異常波の変容

発作性異常波の変容類型	例数
3c/sec S-W → (-)	12 (40%)
3c/sec S-W 	10 14 4 (47%)
3c/sec S-W 持続	2 (6.6%)
ForIS-W → 持続または(-)	2 (6.6%)
計	30 (100%)

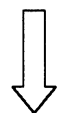
注：S-W=spike and wave complex

ForIS-W=fast or irregular spiky and wave complex



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



研究目的: 定型欠神発作の予後の報告は少なくないが, 本発作型の脳波の経時的変容についての詳細な報告は少ない。そこで本問題の一端を解明する目的で, 3 年~15 年にわたり経過観察しれた臨床・脳波上より厳格に規定した定型欠神発作 30 例につき脳波所見(間歇期全般性発作性異常波)の変容を中心に予後を検討した成績を述べ, 間歇期全般性発作性異常波の変容に影響をおよぼす因子につき考察を加えた。